

【安藤昌益研究の最前線（その11）】

安藤昌益の真営道医学を伝承した江戸の町医・

川村真斎による処方収集書『真斎聚方』における

「本草之部 附方」の処方群〔【X】＝No.210～333〕は、

『本草綱目』の【附方】からの記載であることの考証、

および『真斎聚方』の全体的な構成について———

【X-1】『真斎聚方』〔No.210～223〕

『本草綱目』巻八〔金石部〕、および巻九～十一〔石部〕

——さらに、真斎の「筆写・抄出方法」から

『真斎謄筆』と稿本『自然真営道』との

内容的同一性について考える

和田耕作

（KOSAKU WADA）

◎・はじめに・◎

安藤昌益の真営道医学を継承した川村真斎（1785～1852）による処方収集書『真斎聚方』（内藤記念くすり博物館蔵本）は、浩瀚な著作である。

本稿では、本誌「PHN」35号に引き続いて、No.115以降の処方群と、それらに関連すると思われる『名家方選』三部作の処方群についての考証と考察を進める予定であったが、今回は、急遽予定を変更して、『真齋聚方』の「最終見出し」であるところの「本草之部 附方」〔No.210～333〕についての考証と考察を行うことにした。

「本草之部 附方」は、それまでの記述とは、大きく異なっており、その「出典」書目数も膨大であり、何による記載であるのかが、これまで不明であった。それは、『真齋聚方』における「最後の難関」と思われた。

しかし、実際に調査をしてみると、この問題は、以外にもすぐさま解決したのである。すなわち、「本草之部 附方」は、『本草綱目』の【附方】からの記載であることが、このたび明らかとなった。

『本草綱目』は、各薬物などを、

【釈名】【集解】【正誤】【修治】【気味】【主治】【發明】【附方】

の八項目にわけて記述している。

真齋は、最後の【附方】の処方群の中から選んで記載していることが明らかになった。一部には、【發明】や【修治】の項目からも記載しているところもある。

『真齋聚方』「本草之部 附方」には、『本草綱目』の書名も、処方のある巻数や「薬物名」などの項目も記されていない。したがって、本稿では【附方】などのある『本草綱目』の巻数や分類項目、さらには「薬物名」などをも示して、『真齋聚方』「本草之部 附方」の内容構成が明確となるように記述することとした。

今回は、その第1回目であり、【X-1】=『真齋聚方』〔No.210～223まで〕、すなわち、『本草綱目』では、巻八〔金石部〕、および巻九～十一〔石部〕に相当する部分である。

◎・『真齋聚方』の全体的構成について・◎

このたび、「本草之部 附方」の「出典」が判明したことにより、『真齋聚方』の全体的な構成を、次のように把握することができるようになった。

▼【第一部】・・・『真齋聚方』・「第一編」▼

・『真齋聚方』〔No.1～36〕

・この巻頭部分は、『類聚方集覧』などから記載によるものであり、

おもに『真齋方記』へと増補されるところのものである。

〔『PHN』32号（2018年8月号）を参照〕

▼【第二部】・・・『真齋聚方』・「第二編」▼

・『真齋聚方』〔「A」=No.37～115〕+〔「B」=No.116～209〕

・次は、各医書群と『名家方選』三部作からの処方群である。

〔「A」については、『PHN』33号（2018年9月号）～35号

（2018年11月号）を参照。〕

〔「B」については、今後、考証の予定であるが、その一部であ

る安藤昌益と山脇東洋の処方群については、『PHN』30号

（2018年4月号）・31号（2018年5月号）を参照のこと。〕

▼【第三部】・・・『真齋聚方』・「第三編」▼

・『真齋聚方』〔「A」=No.210～223〕+〔「B」=No.223～333〕

- ・『真齋聚方』の「第三編」と言える「本草之部 附方」は、この
たび『本草綱目』【附方】などからの記載であることが明らかに
なったのである。
 - ・『真齋聚方』の「本草之部 附方」は、分量的には、『真齋聚方』
の中の三分の一を超えており、上記の「第一編」と「第二編」
を合わせて、仮に『真齋聚方』の「前編」とすれば、明らかに
『真齋聚方』の「後編」と呼んでよいものである。
〔「A」については、『PHN』36号（2019年1月号）を参照〕
〔「B」については、今後、考証の予定である。〕
-

●・【出典】の考証のための文献一覧・●

- ・『新註校定・国譯本草綱目』（第三冊）〔水部・火部・土部・金石部〕
（昭和49年5月、新註増補版、春陽堂書店刊）〔和田文庫蔵〕
〔以下、『国訳本草綱目』（第三冊）と略記する。〕
 - ・〔明〕李時珍『本草綱目』（全二冊）
（1986年5月、商務印書館香港分館刊）〔和田文庫蔵〕
-

▼凡例▼

-
- 〔金〕○.....。〔『本草綱目』の薬物名〕
- 【附方】.....（No.210）.....。〔『真齋聚方』のNo.〕
- 〔1／5〕.....。〔『本草綱目』の5処方の中の1処方を記載の意〕
- ・「軽粉破口」.....。「外台」〔A〕 〔外台秘要〕〔B〕
〔A〕＝『真齋聚方』における略書名。
〔B〕＝『本草綱目』を参照したわかりやすい書名。
.....
 - ・「▲」は、『真齋聚方』に出典が欠落しているもの。
 - ・「――」は、『本草綱目』に出典の記載なきもの。
.....
-

.....

▼《I.》▼

▼『本草綱目』卷八「金石部」.....「金之一」（金類）より▼

.....

○〔金〕○.....〔『国訳本草綱目』（第三冊、p.139）〕

【附方】.....（No.210）〔1／5〕

・①「輕粉破口」.....「外台」〔外台秘要〕

○〔銀〕○.....〔『国訳本草綱目』（第三冊、p.149）〕

【附方】.....（No.210）〔3／6〕

・①「妊娠腰痛」.....「子母」〔子母秘録〕

・②「胎動欲墮」.....「婦良」〔婦人良方〕

・③「身面赤疵」.....「千翼」〔千金翼方〕

○〔赤銅〕○.....〔『国訳本草綱目』（第三冊、p.160）〕

【附方】.....（No.210）〔1／1〕

・①「腋下狐臭」.....「外台」〔外台秘要〕

○〔自然銅〕○.....〔『国訳本草綱目』（第三冊、p.163）〕

【附方】.....（No.210）〔1／3〕

・①「項下氣瘰」.....「直指」〔仁齋直指方〕

○〔銅青〕○.....〔『国訳本草綱目』（第三冊、p.170）〕

【附方】.....（No.210~211）〔6／13〕

・①「爛弦風眼」.....「易簡」〔易簡方〕

・②「赤髮禿落」.....「普濟」〔普濟方〕

・③「面黧黑痣」.....「聖濟」〔聖濟録〕

・④「走馬牙疳」.....「經驗」〔真人經驗方〕

・⑤「臙瘡頑癬」.....「筆雜」〔筆峯雜興〕

・⑥「諸蛇螫毒」.....「千金」〔千金方〕

○〔鉛〕○.....〔『国訳本草綱目』（第三冊、p.172）〕

【附方】.....（No.211）〔3／21〕

・①「療瘰結核」.....「傳信」〔傳信方〕

・②「解砒霜毒」.....「危病」〔華佗危病方〕

・③「解硫黃毒」.....「集簡」〔集簡方〕

○〔粉錫〕○.....〔『国訳本草綱目』（第三冊、p.183）〕

【附方】・・・・・・ (No.211~212) [23/44]

- ・①「小兒無辜疳」・・・・・・「子母」〔子母秘録〕
- ・②「小兒腹脹」・・・・・・「子母」
- ・③「腹皮青色」・・・・・・「子母」
- ・④「小兒夜啼」・・・・・・「子母」
- ・⑤「寸白虵虫」・・・・・・「備急」〔備急方〕
- ・⑥「鼻衄不止」・・・・・・「聖惠」〔聖惠方〕
- ・⑦「齒縫出血」・・・・・・「聖濟」〔聖濟録〕
- ・⑧「墜撲瘀血」・・・・・・「肘後」〔肘後方〕
- ・⑨「折傷接骨」・・・・・・「接骨」〔接骨方〕
- ・⑩「抓傷面皮」・・・・・・「集簡」〔集簡方〕
- ・⑪「食梅牙●〔齒ヘンに楚〕」・・・・・・「相感」〔相感志〕
- ・⑫「染白鬚髮」・・・・・・「博物」〔博物志〕
- ・⑬「腋下胡臭」・・・・・・「千金」〔千金方〕
- ・⑭「陰股常濕」・・・・・・「備急」〔備急方〕
- ・⑮「乾濕癬瘡」・・・・・・「備急」
- ・⑯「燕口吻瘡」・・・・・・「▲」〔普濟方〕
- ・⑰「痘瘡癍痕」・・・・・・「小兒」〔陳文中小兒方〕
- ・⑱「瘡似峰窠」・・・・・・「聖濟」〔聖濟録〕
- ・⑲「血風腫瘡」・・・・・・「孫氏集効方」、「楊氏簡便方」
- ・⑳「諸蛇螫傷」・・・・・・「千金」〔千金方〕
- ・㉑「誤吞金銀」・・・・・・「外台」〔外台秘要〕
- ・㉒「三年目翳」・・・・・・「聖惠」〔聖惠方〕

・「予用鉛糖鉛糖蘭說製未極是予別有說」との真齋の按文
がある。

- ・㉓「接骨統筋」・・・・・・「易簡」〔易簡方〕

○〔鉛丹〕○・・・・・・〔『国訳本草綱目』（第三冊、p.191）〕

【附方】・・・・・・ (No.212) [9/33]

- ・①「吐血咯血」・・・・・・「經驗」〔經驗方〕
- ・②「寒熱瘧疾」・・・・・・「——」
- ・③「赤目及翳」・・・・・・「千金」〔千金方〕
- ・④「小兒口瘡」・・・・・・「普濟」〔普濟方〕
- ・⑤「婦人逆産」・・・・・・「集驗」〔集驗方〕
- ・⑥「蠍蠃螫人」・・・・・・「肘後」〔肘後方〕
- ・⑦「金瘡出血」・・・・・・「▲」〔集玄方〕

・「金瘡出血」の途中から欠落あり。

・原文の「為末」と「為末」の間の文が欠落。明らかな転記ミスである。

・⑧〔「外痔腫痛」〕……………「嬰童」〔嬰童百問〕

・「外痔腫痛」の前半まで欠落している。

・⑨「血風腫瘡」……………「積徳」〔積徳堂方〕

○〔密陀僧〕○……………〔『国訳本草綱目』（第三冊、p.198）〕

【発明】……………（No.212）

・この項からの記載あり。

【附方】……………（No.212～213）〔9／18〕

・①「香口去臭」……………「普濟」〔普濟方〕

・②「小兒口瘡」……………「簡易」〔簡易方〕

・③「鼻皴赤皴」……………「聖恵」〔聖恵方〕

・④「痘瘡癰腫」……………「聖恵」〔聖恵方〕

・⑤「●〔黒の右に干〕●〔黒の右に曾〕斑点」……………

……………「聖恵」〔聖恵方〕

・⑥「夏月汗斑〔斑〕」……………「心統」〔活人心統〕

・⑦「骨疽出骨」……………「寿域」〔寿域方〕

・⑧「血風腫瘡」……………「集効」〔集効方〕

・⑨「陰汗湿痒」……………「——」

○〔錫〕○……………〔『国訳本草綱目』（第三冊、p.203）〕

【附方】……………（No.213）〔1／2〕

・①「解砒霜毒」……………「濟急」〔濟急方〕

○〔鉄〕○……………〔『国訳本草綱目』（第三冊、p.218）〕

【附方】……………（No.213）〔1／6〕

・①「脱肛歴年」……………「集驗」〔集驗方〕

○〔鋼鉄〕○……………〔『国訳本草綱目』（第三冊、p.222）〕

○○〔鉄粉〕……………〔『国訳本草綱目』（第三冊、p.224）〕

【附方】……………（No.213）〔5／6〕

・①「驚癇発熱」……………「聖恵」〔聖恵方〕

・②「急驚涎潮」……………「▲」〔楊氏家蔵方〕

・③「傷寒陽毒」……………「心鑑」〔全幼心鑑〕

・④「頭痛鼻塞」……………「▲」〔聖恵方〕

・⑤「雌雄疔腫」……………「集玄」〔集玄方〕

○○〔鍼砂〕……………〔『国訳本草綱目』（第三冊、p.225）〕

【附方】……………（No.213）〔4／10〕

- ・①「風湿脚痛」・・・・・・・・「摘玄」〔摘玄方〕
- ・②「脾勞黃病」・・・・・・・・「摘玄」
- ・③「項下氣癭」・・・・・・・・「直指」〔直指方〕
- ・④「染白鬚髮」・・・・・・・・「——」

○〔鉄鑪〕○・・・・・・・・〔『国訳本草綱目』（第三冊、p.232）〕

【附方】・・・・・・・・（No.213～214）〔5／8〕

- ・①「湯火傷瘡」・・・・・・・・「積徳」〔積徳堂方〕
- ・②「風瘡癰疹」・・・・・・・・「集簡」〔集簡方〕
- ・『本草綱目』では、「湯火傷瘡」の前にあり。

- ・③「脚腿紅腫」・・・・・・・・「恵濟」〔恵濟方〕
- ・④「重舌腫脹」・・・・・・・・「生々」〔生生編〕
- ・⑤「小兒口瘡」・・・・・・・・「集簡」〔集簡方〕

○〔鉄漿〕○・・・・・・・・〔『国訳本草綱目』（第三冊、p.234）〕

【附方】・・・・・・・・（No.214）〔1／5〕

- ・①「漆瘡作痒〔癢〕」・・・・・・・・「外台」〔外台秘要〕

○〔諸鉄器〕○・・・・・・・・〔『国訳本草綱目』（第三冊、p.235）〕

【附方】・・・・・・・・（No.214）〔2／4〕

- ・①「舌腫咽痛」・・・・・・・・「聖恵」〔聖恵方〕
- ・②「誤吞竹木」・・・・・・・・「集玄」〔集玄方〕

○○〔鉄鋸〕・・・・・・・・〔『国訳本草綱目』（第三冊、p.239）〕

- ・【主治】「誤竹木・・・」・・・・・・・・（No.214）

・〔鉄鋸〕【主治】の項からの記載である。

●【考察1】●

『真齋聚方』「本草之部 附方」が、『本草綱目』巻八の「金石部」から始まっているのはなぜであろうか。それは、次の『本草綱目』の構成から明らかである。

『本草綱目』（巻一）・・・・・・・・「序例上」

『本草綱目』（巻二）・・・・・・・・「序例下」

『本草綱目』（巻三）・・・・・・・・「百病主治薬上」

『本草綱目』（巻四）・・・・・・・・「百病主治薬下」

『本草綱目』（巻五）・・・・・・・・「水部」

『本草綱目』（巻六）・・・・・・・・「火部」

『本草綱目』（巻七）・・・・・・・・「土部」

すなわち、『本草綱目』（巻一）から『本草綱目』（巻四）までは、臨床的な内容ではなく、『本草綱目』（巻五）から『本草綱目』（巻七）は、【附方】もあり臨床的な内容であるが、【附方】の数も少なく、その頻用性は低いように思えるのである。

真斎は、より臨床的で頻用性のある『本草綱目』巻八「金石部」から記載を始めたと考えてよいであろう。

ちなみに、小野蘭山『本草綱目啓蒙』もまた、『本草綱目』（巻一）から『本草綱目』（巻四）までを省略し、『本草綱目』（巻五）の「水之部」からを、「巻之一」として記述しているのである。

真斎の記載には、明らかな転記ミスもみられるが、基本的に原文の内容どおりに記載していると言える。

「出典」の書目は、『本草綱目』におけるフルネームを「略名」で表記している。

.....

▼《Ⅱ.》▼

▼『本草綱目』巻八「金石部」・・・「石之二」（玉類）より▼

.....

○〔珊瑚〕○・・・〔『国訳本草綱目』（第三冊、p.261）〕

【附方】・・・（No.214）〔1／1〕

・①「小児麤臂」・・・「篋中」〔錢相公篋中方〕

○〔雲母〕○・・・〔『国訳本草綱目』（第三冊、p.273）〕

【附方】・・・（No.214）〔9／14〕

・①「小兒下痢」・・・「心鑑」〔食医心鑑〕

・②「赤白久痢」・・・「千金」〔千金方〕

・③「婦人帶下」・・・「千金」

・④「小便淋疾」・・・「▲」〔千金方〕

・⑤「婦人難産」・・・「積徳」〔積徳堂方〕

・⑥「粉滓面●〔黒の右に干〕」・・・「聖濟」〔聖濟録〕

・⑦「風●〔ヤマイダレに軫〕遍身」・・・「千金」

・⑧「一切惡瘡」・・・「千金」

・⑨「金瘡出血」・・・「▲」〔事林廣記〕

.....

▼《Ⅲ.》▼

▼『本草綱目』巻九「石部」・・・「石之三」（石類上）より▼

.....

○〔丹砂〕○・・・〔『国訳本草綱目』（第三冊、p.295）〕

【附方】・・・（No.214）〔3／34〕

・①「妊婦胎動」・・・「普濟」〔普濟方〕

・②「子死腹中」・・・「十全」〔十全博救方〕

・③「目生障翳」・・・「普濟」

○〔水銀〕○・・・〔『国訳本草綱目』（第三冊、p.316）〕

【附方】・・・・・・（No.214）〔1／29〕

・①「白癩風痒」・・・・・・「千金」〔千金方〕

○〔雄黄〕○・・・・・・〔『国訳本草綱目』（第三冊、p.349）〕

【附方】・・・・・・（No.214～215）〔14／62〕

・①「偏頭風病」・・・・・・「博濟」〔博濟方〕

・②「百虫入耳」・・・・・・「▲」〔十便良方〕

・③「蜘蛛傷人」・・・・・・「乾〔朝〕野」〔朝野僉載〕

・④「金瘡内漏」・・・・・・「肘後」〔肘後方〕

・⑤「杖瘡腫痛」・・・・・・「救急」〔救急方〕

・⑥「解藜蘆毒」・・・・・・「外台」〔外台秘要〕

・⑦「小兒痘疔」・・・・・・「証治」〔痘疹証治〕

・⑧「眉毛脱落」・・・・・・「聖濟」〔聖濟録〕

・⑨「蛇纏惡瘡」・・・・・・「▲」〔普濟方〕

・⑩「纏喉風痺」・・・・・・「統千金方」

・⑪「牙齒虫痛」・・・・・・「類要」

・⑫「走馬牙疳」・・・・・・「全幼」〔全幼心鑑〕

・⑬「耳出臭膿」・・・・・・「聖濟」〔聖濟方〕

・⑭「臙瘡日久」・・・・・・「筆峯」〔筆峯雜興〕

○○〔熏黄〕・・・・・・〔『国訳本草綱目』（第三冊、p.364）〕

【附方】・・・・・・（No.215）〔2／5〕

・①「欬嗽熏法」・・・・・・「千金」〔千金方〕

・②「手足甲疽」・・・・・・「近効」〔近効方〕

○〔雌黄〕○・・・・・・〔『国訳本草綱目』（第三冊、p.365）〕

【附方】・・・・・・（No.215）〔4／12〕

・①「烏癩虫瘡」・・・・・・「聖恵」〔聖恵方〕

・②「牛皮頑癬」・・・・・・「直指」〔直指方〕

・③「腎消尿数」・・・・・・「聖濟」〔聖濟録〕

・④「小便不禁」・・・・・・「經驗」〔經驗方〕

・上記③④の二方は、『本草綱目』では①「烏癩虫瘡」の前にあり。

○〔石膏〕○・・・・・・〔『国訳本草綱目』（第三冊、p.370）〕

【附方】・・・・・・（No.215～216）〔9／29〕

・①「傷寒發狂」・・・・・・「本事」〔本事方〕

・②「水瀉腹鳴」・・・・・・「李樓」〔李樓奇方〕

・③「乳汁不下」・・・・・・「子母」〔子母秘録〕

・④「婦人乳癰」・・・・・・「經驗」〔經驗方〕

・⑤「油傷火灼」・・・・・・「梅師」〔梅師方〕

- ・⑥「金瘡出血」・・・・・・・・・・「積徳」〔積徳堂方〕
- ・⑦「刀瘡傷湿」・・・・・・・・・・「積徳」
- ・⑧「瘡口不斂」・・・・・・・・・・「局方」〔和劑局方〕
- ・⑨「口痛〔瘡〕咽痛」・・・・・・・・・・「三因」〔三因方〕

・「以上 石膏之部也」との真斎の文がある。

○〔滑石〕○・・・・・・・・〔『国訳本草綱目』（第三冊、p.392）〕

【發明】・・・・・・・・（No.216）

・この項の「頌曰・・・」からの記載がある。

【附方】・・・・・・・・（No.216）〔7／19〕

- ・①「傷寒衄血」・・・・・・・・・・「本事」〔本事方〕
- ・②「氣壅関格」・・・・・・・・・・「▲」〔廣利方〕
- ・③「小便不通」・・・・・・・・・・「楊氏」〔楊氏産乳〕
- ・④「婦人転脬」・・・・・・・・・・「聖恵」〔聖恵方〕
- ・⑤「妊娠子淋」・・・・・・・・・・「外台」〔外台秘要〕
- ・⑥「痘瘡狂乱」・・・・・・・・・・「痘疹」〔王氏痘疹方〕
- ・⑦「益元散」・・・・・・・・・・「直格」〔傷寒直格〕

・『本草綱目』では、⑦「益元散」は、これら【附方】の最初にあるものであるが、⑥「痘瘡狂乱」の中で「益原〔元〕散」に「・・・を加え」、とあるため、真斎は、ここに処方のみ部分を記載している。『本草綱目』における「益元散」の原文は、極めて長文なものである。

○〔五色石脂〕○・・・・・・・・〔『国訳本草綱目』（第三冊、p.405）〕

○○〔白石脂〕・・・・・・・・〔『国訳本草綱目』（第三冊、p.409）〕

【附方】・・・・・・・・（No.216）〔3／6〕

- ・①「児臍汁出」・・・・・・・・・・「獨行」〔韋宇獨行方〕
- ・②「児臍出血」・・・・・・・・・・「衍義」〔寇氏衍義〕
- ・③「粉滓面●〔黒の右に干〕」・・・・・・・・「聖濟」〔聖濟録〕

○○〔赤石脂〕・・・・・・・・〔『国訳本草綱目』（第三冊、p.411）〕

【附方】・・・・・・・・（No.216）〔3／12〕

- ・①「痰飲吐水」・・・・・・・・・・「千翼」〔千金翼方〕
- ・②「経水過多」・・・・・・・・・・「普濟」〔普濟方〕
- ・③「小便不禁」・・・・・・・・・・「普濟」

○〔爐甘石〕○・・・・・・・・〔『国訳本草綱目』（第三冊、p.416）〕

【附方】・・・・・・・・（No.217）〔5／15〕

- ・①「一切目疾」・・・・・・・・・・「——」
- ・②〔「爛弦風眼」〕・・・・・・・・・・「——」

・「爛弦風眼」の方中から「宣明眼科方」のみを記載している。

- ・③「聾耳出汁」・・・・・・・・・・「普濟」〔普濟方〕

- ・④「下疳陰瘡」・・・・・・・・・・「▲」〔通妙邵真人方〕
 - ・⑤「陰汗湿痒」・・・・・・・・・・「直指」〔直指方〕
- 〔石灰〕○・・・・・・・・〔『国訳本草綱目』（第三冊、p.456）〕
- 【附方】・・・・・・・・（No.217）〔13／46〕
- ・①「染髮烏鬚」・・・・・・・・・・「集玄」〔集玄方〕
 - ・②「身面疣目」・・・・・・・・・・「千金」〔千金方〕
 - ・③「面黧疣痣」・・・・・・・・・・「集玄」〔集玄方〕
 - ・④「疣痣瘤贅」・・・・・・・・・・「普濟」〔普濟方〕
 - ・⑤「癰疽瘡肉」・・・・・・・・・・「普濟」
 - ・⑥「疔瘡惡腫」・・・・・・・・・・「普濟」
 - ・⑦「湯火傷灼」・・・・・・・・・・「肘後」〔肘後方〕
 - ・⑧「杖瘡腫痛」・・・・・・・・・・「集簡」〔集簡方〕
 - ・⑨「刀刃金瘡」・・・・・・・・・・「肘後」
 - ・⑩「誤吞金銀」・・・・・・・・・・「秘宝」〔秘宝方〕
 - ・⑪「馬汁〔汗〕入瘡」・・・・・・・・・・「摘玄」〔摘玄方〕
 - ・⑫「螻蛄咬人」・・・・・・・・・・「聖恵」〔聖恵方〕
 - ・⑬「蚯蚓咬人」・・・・・・・・・・「經驗」〔經驗方〕
- 〔浮石〕○・・・・・・・・〔『国訳本草綱目』（第三冊、p.465）〕
- 【附方】・・・・・・・・（No.217）〔1／12〕
- ・①「頭核腦痺」・・・・・・・・・・「直指」〔直指方〕

●【考察2】●

【附方】からの各処方の記載の順序については、『本草綱目』での順序を、変更しているところがあることがわかる。

○〔陽起石〕○・・・・・・・・〔『国訳本草綱目』（第三冊、p.473）〕

【修治】・・・・・・・・（No.218）

・この項の全文を記載している。

○〔陽起石〕○・・・・・・・・〔『国訳本草綱目』（第三冊、〔慈石〕○・・・・・・・・〔『国訳本草綱目』（第三冊、p.478）〕

【附方】・・・・・・・・（No.218）〔9／15〕

- ・①「耳卒聾閉」・・・・・・・・・・「直指」〔直指方〕
- ・②「陽事不起」・・・・・・・・・・「千金」〔千金方〕
- ・③「眼昏内障」・・・・・・・・・・「原機」〔原機啓微集〕
- ・④「小兒驚癇」・・・・・・・・・・「聖濟」〔聖濟録〕
- ・⑤「子宮不収」・・・・・・・・・・「――」
- ・⑥「金瘡腸出」・・・・・・・・・・「鬼遺」〔鬼遺方〕

- ・⑦「金瘡血出」・・・・・・・・・・「千金」〔千金方〕
- ・⑧「丁腫熱毒」・・・・・・・・・・「外台」〔外台秘要〕
- ・⑨「諸般腫毒」・・・・・・・・・・「乾坤」〔乾坤秘韞〕

○〔代赭石〕○・・・・・・・・〔『国訳本草綱目』（第三冊、p.487）〕

【發明】・・・・・・・・（No.218）

・この項から「珍注・・・」の部分に記載している。

【附方】・・・・・・・・（No.218～219）〔6／16〕

- ・①「腸風下血」・・・・・・・・・・「斗門」〔斗門方〕
- ・②「吐血衄血」・・・・・・・・・・「斗門」
- ・③「墮胎下血」・・・・・・・・・・「聖濟」〔聖濟録〕
- ・④「婦人血崩」・・・・・・・・・・「普濟」〔普濟方〕
- ・⑤「赤眼腫閉」・・・・・・・・・・「直指」〔直指方〕
- ・⑥「喉痺腫痛」・・・・・・・・・・「普濟」〔普濟方〕

○〔禹餘糧〕○・・・・・・・・〔『国訳本草綱目』（第三冊、p.494）〕

【附方】・・・・・・・・（No.219）〔2／9〕

- ・①「身面癢痕」・・・・・・・・・・「聖濟」〔聖濟録〕
- ・②「大風癘疾」・・・・・・・・・・「聖惠」〔聖惠方〕

○〔綠青〕○・・・・・・・・〔『国訳本草綱目』（第三冊、p.514）〕

【附方】・・・・・・・・（No.219）〔1／4〕

- ・①「液下胡臭」・・・・・・・・・・「集玄」〔集玄方〕

○〔石胆〕○・・・・・・・・〔『国訳本草綱目』（第三冊、p.520）〕

【附方】・・・・・・・・（No.219）〔5／20〕

- ・①「喉痺喉風」・・・・・・・・・・「濟生」〔濟生方〕
- ・②「齒痛及落」・・・・・・・・・・「外台」〔外台秘要〕
- ・③「風犬咬毒」・・・・・・・・・・「濟急」〔濟急方〕
- ・④「液下胡臭」・・・・・・・・・・「簡易」〔簡易方〕
- ・⑤「赤白癩風」・・・・・・・・・・「聖濟」〔聖濟録〕

○〔礞石〕○・・・・・・・・〔『国訳本草綱目』（第三冊、p.552）〕

【附方】・・・・・・・・（No.219）〔2／4〕

- ・①「一切積病」・・・・・・・・・・「楊氏」〔楊氏家藏方〕
- ・②「急慢驚風」・・・・・・・・・・「湯氏」〔湯氏嬰孩寶鑑〕

○〔蛇黃〕○・・・・・・・・〔『国訳本草綱目』（第三冊、p.581）〕

【附方】・・・・・・・・（No.219～220）〔5／6〕

- ・①「暗風癘疾」・・・・・・・・・・「得效」〔危氏得效方〕
- ・②「驚風癘瘡」・・・・・・・・・・「靈苑」〔靈苑方〕

- ・③「小児項軟」・・・「活幼」〔活幼全書〕
- ・④「血痢不止」・・・「普濟」〔普濟方〕
- ・⑤「腸風下血」・・・「普濟」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

▼《V.》▼

▼『本草綱目』卷十一「石部」・・・「石之五」（鹵石類）より▼

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

○〔食塩〕○・・・・・・・・〔『国訳本草綱目』（第三冊、p.589）〕

【発明】・・・・・・・・（No.220）

・この項の「頌曰・・・」からの記載がある。

【附方】・・・・・・・・（No.220）〔1／69〕

- ・①「脱陽虚證」・・・「救急」〔救急方〕

○〔凝水石〕○・・・・・・・・〔『国訳本草綱目』（第三冊、p.618）〕

【附方】・・・・・・・・（No.220）〔3／4〕

- ・①「牙齦出血」・・・「普濟」〔普濟方〕
- ・②「湯火傷灼」・・・「易簡」〔易簡方〕
- ・③「小児丹毒」・・・「経験」〔経験方〕

・「以上 三方 寒水石 皆凝水石也」との真斎の文がある。

これは、おそらく『本草綱目啓蒙』（小野蘭山）の「凝水石」の項にある「是真の寒水石ニシテ、即、塩ノニガリノ凝リテ石ノ如キ者ナリ。」「葉肆ニ●〔佳の下に口〕（うる）トコロノ寒水石ハ、皆方解石ニシテ真物ニ非ズ。本邦ニテ誤リ来ルコト久シ。因テ和書ニ寒水石トアルハ、方解石ヲ用ユベシ。」（『本草綱目啓蒙』1、p.145、東洋文庫531、平凡社刊）などの記述をふまえてのものであろう。

なお、真斎が『本草綱目啓蒙』を読んで書いたと思われる「按文」は、『PHN』第34号における考証の中にもみられた。

○〔朴消〕○・・・・・・・・〔『国訳本草綱目』（第三冊、p.630）〕

【附方】・・・・・・・・（No.220～221）〔15／32〕

- ・①「関格不通」・・・「百一」〔百一方〕
- ・②「小便不通」・・・「簡要」〔簡要済衆方〕
- ・③「時気頭痛」・・・「聖恵」〔聖恵方〕
- ・④「赤眼腫痛」・・・「簡便」〔簡便方〕

- ・⑤「牙齒疼痛」・・・・・・・・・・「普濟」〔普濟方〕
- ・⑥「食蟹齧腫」・・・・・・・・・・「普濟」
- ・⑦「喉痺腫痛」・・・・・・・・・・〔外台秘要〕
- ・⑧「小兒重舌」・・・・・・・・・・「姚和」〔姚和衆〕
- ・⑨「口舌生瘡」・・・・・・・・・・「孫真人方」
- ・⑩「小兒驚口」・・・・・・・・・・「簡要」〔簡要濟衆方〕
- ・⑪「代指腫痛」・・・・・・・・・・「聖惠」〔聖惠方〕
- ・⑫「一切風疹」・・・・・・・・・・「梅師」〔梅師〔方〕〕
- ・⑬「漆瘡作痒」・・・・・・・・・・「千金」〔千金方〕
- ・⑭「婦人難產」・・・・・・・・・・「信効」〔信効方〕
- ・⑮「死胎不下」・・・・・・・・・・「信効」〔信効方〕

○〔玄明粉〕○・・・・・・・・〔『国訳本草綱目』（第三冊、p.644）〕

【附方】・・・・・・・・（No.221）〔1／3〕

- ・①「鼻血不止」・・・・・・・・・・「聖濟」〔聖濟〔録〕〕

○〔消石〕○・・・・・・・・〔『国訳本草綱目』（第三冊、p.648）〕

○○〔生消〕・・・・・・・・〔『国訳本草綱目』（第三冊、p.660）〕

【附方】・・・・・・・・（No.221）〔6／14〕

- ・①「頭痛欲死」・・・・・・・・・・「炮炙」〔炮炙論〕
- ・②「諸心腹痛」・・・・・・・・・・「集玄」〔集玄方〕
- ・③「腰腹諸疾」・・・・・・・・・・「集玄」
- ・④「眼目障翳」・・・・・・・・・・〔張三丰仙方〕

・この項の記載は、混乱している。

・「・・・一点復明」までが「眼目障翳」の説明文であり、それは
「眼目障翳」の説明文の一部分である。

・末尾の「至旦塩水洗去之」の文は、この処方前にある

「赤眼腫痛」の説明文の末尾の文である。「出典」の「聖惠」
〔聖惠方〕も、この処方のものである。

- ・⑤「風熱喉痺」・・・・・・・・・・「三因」〔三因方〕
- ・⑥「重舌驚口」・・・・・・・・・・「普濟」〔普濟方〕

○〔礞砂〕○・・・・・・・・〔『国訳本草綱目』（第三冊、p.665）〕

【附方】・・・・・・・・（No.221）〔1／28〕

- ・①「魚骨哽咽」・・・・・・・・・・「外台」〔外台秘要〕

○〔蓬砂〕○・・・・・・・・〔『国訳本草綱目』（第三冊、p.675）〕

【発明】・・・・・・・・（No.221）

・この項の「洪邁夷堅志云・・・」からの記載がある。

【附方】・・・・・・・・（No.221）〔4／12〕

- ・①「鼻血不止」・・・・・・・・・・「集簡」〔集簡方〕
- ・②「飲酒不酔」・・・・・・・・・・「相感」〔相感志〕
- ・③「木舌腫強」・・・・・・・・・・「普濟」〔普濟方〕
- ・④「咽喉穀賊」・・・・・・・・・・「直指」〔直指方〕

・『本草綱目』では、③、④、②の順である。

○〔石硫黄〕○・・・・・・・・〔『国訳本草綱目』（第三冊、p.679）〕

【附方】・・・・・・・・（No.221～222）〔10／49〕

- ・①「小兒聾耳」・・・・・・・・・・「千金」〔千金方〕
- ・②「小兒口瘡」・・・・・・・・・・「得効」〔危氏得効方〕
- ・③「耳卒声〔聾〕閉」・・・・・・・・・・「千金」〔千金方〕
- ・④「欬逆打呃」・・・・・・・・・・「摘要」〔医方摘要〕
- ・⑤「頭痛頭風」・・・・・・・・・・「普濟」〔普濟方〕
- ・⑥「腎虚頭痛」・・・・・・・・・・「聖恵方」「本事方」「普濟方」
- ・⑦「鼻上作痛」・・・・・・・・・・「澹寮」〔澹寮方〕
- ・⑧「酒●〔査の右に皮〕赤鼻」・・・・・・「瑞竹堂方」
- ・⑨「鼻面紫風」・・・・・・・・・・「宣明」〔宣明方〕
- ・⑩「身面疣目」・・・・・・・・・・「普濟」〔普濟方〕

・『本草綱目』では、①、②、③が、⑩の後にある。

○〔礬石〕○・・・・・・・・〔『国訳本草綱目』（第三冊、p.700）〕

【附方】・・・・・・・・（No.222～223）〔16／86〕

- ・①「口舌生瘡」・・・・・・・・・・「定斎方」「張子和方」
- ・②「口中気臭」・・・・・・・・・・「生々」〔生生編〕
- ・③「衄血不止」・・・・・・・・・・「聖濟」〔聖濟方〔録〕〕
- ・④「赤目風腫」・・・・・・・・・・「集簡」〔集簡方〕
- ・⑤「爛弦風眼」・・・・・・・・・・「永類」〔永類方〕
- ・⑥「聾耳出汁」・・・・・・・・・・「聖濟」〔聖濟録〕
- ・⑦「卒死壯熱」・・・・・・・・・・「肘后」〔肘後方〕
- ・⑧「風湿膝痛」・・・・・・・・・・「御薬院方」
- ・⑨「蛇虫諸毒」・・・・・・・・・・「瑞竹」〔瑞竹堂方〕
- ・⑩「漆瘡作痒」・・・・・・・・・・「千金」〔千金方〕
- ・⑪「小兒臍腫」・・・・・・・・・・「聖恵」〔聖恵方〕
- ・⑫「身面瘰癧」・・・・・・・・・・「多能」〔多能鄙事〕
- ・⑬「腋下胡臭」・・・・・・・・・・「許堯臣方」
- ・⑭「女人陰痛」・・・・・・・・・・「肘后」〔肘後百一方〕
- ・⑮「丁腫惡瘡」・・・・・・・・・・「宝鑑」〔衛生宝鑑〕
- ・⑯「虫蛇獸毒」・・・・・・・・・・「東坡良方」

・末尾に「按此方 雖不念藥王菩薩 可取効 然唯取愚人之氣乎」

との真斎の按文がある。これは本文に「念藥王菩薩七遍」と

あるのを受けてのものである。

○〔緑礬〕○・・・・・・〔『国訳本草綱目』（第三冊、p.718）〕

【附方】・・・・・・（No.223）〔8／20〕

- ・①「重舌木舌」・・・・・・「積徳」〔陸氏積徳堂方〕
- ・②「爛弦風眼」・・・・・・「永類」〔永類方〕
- ・③「倒睫拳毛」・・・・・・「永類」
- ・④「耳生爛瘡」・・・・・・「摘玄」〔摘玄方〕
- ・⑤「瘡中生蛆」・・・・・・「摘玄」
- ・⑥「湯火傷灼」・・・・・・「経紅〔験〕」〔楊誠経験方〕
- ・⑦「塗染白髪」・・・・・・「相感」〔相感志〕
- ・⑧「腋下胡氣」・・・・・・「直指」〔直指方〕

●【考察3】●

ここにも、すでに指摘したように、一部に記載の混乱がみられる。また、これまでと同様に各処方を記載する順序に入れ替わりがみられる。

◎・むすび・◎

このたび、『真斎聚方』「本草之部 附方」の各処方が、『本草綱目』の各薬物の【附方】からの記載であることが判明したことにより、『真斎聚方』の全体的構成が、ここに初めて明らかになった。

そして、すでに上記の【考察1】においても述べたように、真斎は、『真斎聚方』「本草之部 附方」の各処方を、『本草綱目』の各薬物の【附方】の項から、基本的に「原文」そのままの内容で記載している。

それは、これまでの真斎の「筆写・妙出方法」を踏襲しているものである、と言えるであろう。

各処方の妙出については、真斎の臨床家としての必要性から選ばれたものと思われる。

『真斎聚方』「本草之部 附方」もまた、『本草綱目』の各薬物の【附方】の項から臨床的に参考となる処方群を妙出して、臨床研究に役立てるということが目標であった。その「按文」の一つひとつの内容が、それを物語っている。

いずれにしても、『本草綱目』の各薬物の【附方】を、これほど多く記載した真斎の研究態度には、感服せざるを得ない。

以上は、「第1回目の考証」における「むすび」であり、私はこの時点で『真斎聚方』「本草之部 附方」の全体的な評価を急ぐ必要はないと思う。その全体的な評価は、今後、さらなる「考証と考察」を進めてからでも十分であろう。

さて、先日届いた「安藤昌益と北千住の関係を調べる会通信」（第89号、2019年1月1日発行）には、『真斎聚方』『医論』『迷津槎談』のコピー類を入手して、希望する会員に頒布した旨が記されている。

ここに「備忘録」として記しておく、『真斎聚方』はだいぶ以前に発見されていたが、それを直接閲覧した人は、数人と言われていた。私も今日まで、現物そのものは見ていない。

昨年三月、私が『真斎聚方』の全面複写を依頼するまで、それを全面複写した人は皆無であった。それは、『真斎聚方』が330丁を超える書物のため、撮影・複写の費用もばかにならないためであった、からであろうと思われる。その撮影にかかる費用などは、最初に複写を依頼した人の負担となるからである。

私は、意を決して、それをひとりで負担して、『真斎聚方』のデータを入手したのである。それから、その「出典」の考証などを進めて、今回、その「全体的な構成」が判明するまでに、十か月近くを要したことになる。そして、その「考証」作業は、現在進行形である。

したがって、今後の『真斎聚方』の研究にあたっては、私がこれまでに発表した『真斎聚方』に関連する論考〔「PHN」30号（2018年4月）～「PHN」36号（2019年1月）〕と、今後発表するであろうところの論考〔「PHN」37号（2019年2月、発行予定）以降〕などをも、十二分に踏まえての研究がなされることを希望しておきたい。

『真斎聚方』の原文は、いずれ「内藤記念くすり博物館」の「収蔵品デジタルアーカイブ」にて、公開されていくものと思われる。

〔2019年1月30日、PHN（思想・人間・自然）、第36号、PHNの会発行〕

〔2019年1月30日、和田耕作（C）、無断転載厳禁〕
